

現地を訪問して想うこと

1984年経済学部卒業 Aコース

青山暁

現在芦屋市議会議員を務めております。未曾有の東日本大震災発生時に関西広域連合が割り当てた震災支援カウンターパート市として芦屋市は宮城県石巻市に行政支援をしておりそのご縁もあり宮城県には2度、また福島県には1度訪問しておりましたがなかなか岩手まで行けずにいた中、今回の震災支援ツアー参加で初めて岩手県を訪問することが出来ました。まずは素晴らしい企画を立てて頂いた立命館大学校友会関係各位に感謝申し上げます。

東北沿岸部を訪れてまず感じることは地震と津波は全く違う災害であるということです。阪神淡路大震災の時は潰れた家や店を前に、いつか必ずこの場所で再興するんだという決意意欲が復興の原動力だったと思います。しかしながら今回の津波の場合大半の方々がその地に戻りたくないと思っただけという事実。

発生5ヶ月後、1年後、1年7ヶ月後と東北を訪問させて頂きましたが、直後の余りに悲惨な状況から今や津波被災地はすっかり更地の状態となりしかも草ぼうぼうで、もしかして初めて見た人にしたら最初からこんな土地だったのではないかと思えるぐらいの光景が延々と続いているのです。

この様な状況を目の当たりにして復興への道のりがまだまだ余りに遠いと実感せざるえませんでした。

岩手県校友会の先輩方の体験談には唯々言葉もなく聞き入りました。しかし立命館大学OB同士という繋がりですら交流出来たことは素晴らしいことでした。

阪神淡路大震災を35才で被災経験しその後の人生が大きく変わった自分だからこそ細くても長く長く心の支援していかなければならないことを痛感しております。これからも少しでもお役に立てることがあれば実践し続けていきたいと思っております。